

最も大切なこと

加藤 享

[聖書] コリントの信徒への手紙Ⅰ 15章1～5節

兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。

[序] 墓からの復活

私たちは聖書教育の教案に従って、今年の12月からマタイ福音書を読み進めてきました。今日で一応最終回。来週からローマの信徒への手紙に移ります。先週は主イエスの十字架の死を学びました。主イエスは金曜日の朝9時に十字架にはりつけられ、死の苦しみを6時間も味わい続け、午後3時に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫んで、息絶えられました。

夕方に議員の一人アリマタヤのヨセフが願い出て、遺体を引き取り、自分の新しい墓に丁重に葬りました。一方祭司長たちは総督ピラトに願い出て、軍隊を動員して墓の警護に当たらせました。イエスの弟子たちが夜秘かに遺体を盗み出して、イエスが墓から復活したと宣伝するかも知れないと恐れたからです。

土曜の安息日が終わり、日曜日の明け方にマグダラのマリアともう一人のマリアが、自分たちの手でも主のお体を葬り直したいと、香油をもって墓に出かけました。すると大きな地震が起こり、墓穴の入り口を塞いでいた大きな石が脇に転がされ、その上に天使が座っていました。そしてマリアたちに告げました。「恐れることはない。あの方はもうここにはおられない。復活なさったのだ。」「急いで行って弟子たちに、ガリラヤで主にお会いできると告げなさい」

婦人たちは恐れながらも大いに喜んで、走って弟子たちに知らせに行く途中で、主イエスと出会い、主の足を抱き、ひれ伏しました。マタイ福音書は、婦人たちの知らせに従って、弟子たちはガリラヤに行き、復活された主イエスから、すべての民への宣教命令をいただく所で終わっています。しかし他の三つの福音書は、もう少し詳しく復活の主との出会いを記しています。

[1] 信じられない復活

マタイ福音書の記事で注目すべき言葉は、11人の弟子たちがガリラヤに行き、主から指示された山で復活の主に出会いましたが、「しかし、疑う者もいた」と記している点です。マルコ福音書では、婦人たちが、墓に行って天使から復活を告げられていながら、墓から逃げ去り、恐ろしさのあまりに「だれにも何も言わなかった」と記して終わっています。でもこれでは、弟子たちのその後の変化と結びつかないので、後から結

び一、結び二が付け足されました。ルカとヨハネ福音書になると、もっと具体的に、復活を信じられない弟子たちの姿が記されています。これは、何を物語っているのでしょうか？

三浦綾子は、「この世で何が信じられないといって、イエスの復活ほど信じられない事件はないかもしれない。実の話、私も復活が信じられない何年かがあった。いや、聖書を読むと、使徒たちでさえ、そう簡単にはイエスの復活を信じたのではないことが分かる」と書いています(三浦綾子:新約聖書入門)。

そうです。「死んでしまったら、神でもどうすることも出来ない」と思ってしまう人が多いのではないのでしょうか。しかしもしそうなら、この世界では死が人間の究極の支配者だということになります。このような「あきらめ」に対して 神はNOとおっしゃって、主イエスを墓から復活させられました。墓が人生の終着駅ではないのです。

また日本人は、偉人・英雄が死ぬと神社に神として祀り、生前の偉業をたたえ、そのご利益にあずかろうとします。しかし彼らが犯した罪には一切目をつぶり問題にしません。罪に対する裁きの恐れが欠如していると言えるでしょう。

キリストはご自分では罪を一切犯されませんでした。私たちの罪を全て 我が身に引き受けて、あのように壮絶な十字架の死を遂げられました。そこで神は、そのキリストを復活させて、十字架の死に対する応答を、この世にはっきりとお示しになったのです。このように罪深い私たちの罪を赦し、天国に生きる恵みを約束して下さる復活の恵み ——これが私たちの信じる福音です。

[2] 福音の中心

今日は主の復活を祝うイースターですので、福音の中心である復活を明確に語っているパウロの言葉から、復活を学ぶことにしました。コリント教会へのパウロの第一の手紙の15章を、ざっと読んで参りましょう。パウロが告げ知らせた福音の最も大切なことは、キリストが聖書に書いてあるとおりに、わたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファ(ペトロ)に現れ、その後12人に現れ、さらに多くの信仰者にあらわれ、最後には、熱心にキリスト教徒を迫害していたこのパウロにも、復活の主はご自身を現わして下さった。即ち、キリストの十字架の死と復活こそが福音だと、明確に語っています。

死者の復活などないというなら、キリストも復活しなかったことになり、我々は今なお罪の中にあることになる。するとキリストを信じて眠りについた人も滅んでしまったことになる。単なる望みに過ぎない復活にすがっているのならば、我々はすべての人の中で最も惨めな者だとなるではないか。

しかしキリストは実際に死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられたのである。人類の最初の父祖となったアダムが、善悪の判断だけは神に聞き従うようにと命じられていたのに、禁断の木の実を食べることで、罪の結果としての死をこの世にもたらしてしまった。しかし神は、キリストの死によってその罪を赦し、すべての人が生きていける道を開いて下さった。世の終わりの時に、キリストが再び来られてすべてを支配し、最後の敵である死も滅ぼされる。そして神がすべてにおいて、すべてとなられるのだ。

では、死者はどんな体に復活するのか。麦の種が地に播かれると、麦の穂を実らす体をもって、地上に現れてきて成長するではないか。地上の生物も、神は御心のままに、初めの体とは異なる**新しい体**を、それぞれにお与えになるではないか。**死者の復活も同じだ**。土の中で朽ち果てていく肉の体が、天に属する**霊の体**をもって復活するのだ。最後のラッパが鳴り響くと、死者が**朽ちない者**として復活し、私たちは**天に住む者**に変えられる。この死ぬべき者が**死なないもの**を着る時、「**死は勝利にのみ込まれた**」と言われた預言が実現するのだ、とパウロは説明しています。

[3]祈りに答えてくださる神

千葉県の田舎で、去る3月24日の朝、登校中に行方不明になっていた小学校3年生の女の子の殺人容疑で、**46才の男性**が14日(金)に逮捕されました。彼は何と同じ小学校の保護者会の会長で、学童の登校時に安全を守る働きの先頭に立って居た人物でした。どうやら自分のキャンピングカーの中に連れ込んで殺したようです。自分も小学生の子どもを二人持つ父親です。奥さんと子ども達は、もう地域では生きていけないでしょう。**一家全員の破滅**です。どうしてこのような罪を犯してしまったのでしょうか。罪の恐ろしさと、**罪に弱い人間性**の現実を見せつけられて、心の震えがやみません。

あのイエス・キリストを妬み、憎み、群衆を扇動して十字架にはりつけにした宗教家たち。「十字架につける」「十字架につける」と叫び、イエスを罵倒し続けた群衆たち。「他人は救ったのに、自分は救えない」「今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう」。何という罪深さでしょうか。

「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」。そうです。人々の罪の全てを身に引き受けられた十字架の死は、神から見捨てられて裁きを受ける**罪の恐ろしさ**と**神の裁きの厳しさ**をはっきりと示すものでした。神に捨てられて死を招く**罪の実相**を現わすものでした。

しかしその時にも、主イエスは、「**わが神。わが神**」と呼びかけておられます。神に見捨てられる死に際しても、助けを求める**神を身近に覚えて居られる**のです。そしてその祈りに**神は答えてくださいました**。それが墓よりの**復活**です。神はどんな罪をも赦して、救いをもたらして下さる**愛の神**なのです。

とんでもない罪を犯してしまった46才の保護者会の会長。夫、父の犯罪で生活に破綻をきたしてしまった家族。今こそ、「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」と祈ってほしいと願います。**愛の神が必ず、貴方たちの祈りに答えて、復活の恵み**を下さいます。

[結]栄光の体をいただく復活

復活は**生き返る**ことではありません。もしも今の体と同じ体に生き返るとするならば、病弱な体で苦しみ続けた人は、また同じ苦しみを繰り返すことになります。頭が弱い、力が弱いという**悲しみをまた繰り返す**というのでは、復活は決して喜ばしいものではなくなります。

しかし十字架の死で痛めつけられた主イエスは、天で神と共に生きる**霊の体**をもって墓の中から復活されました。そして世の終わりの時には、天から再び来て下さって、この私をご自分の**栄光ある体と同じ形に変えて、天に連れて行って下さる**のです。何と嬉しいことでしょうか。

パウロはこう言っています。「キリストは万物を支配下に置くことのできる力によって、わたしたちの卑しい体を、ご自分の**栄光ある体**と同じ形に変えてくださるのです」(フィリピ3:21)。パウロは**癩癩(てんかん)**という持病の他に、目も非常に悪く、医者のルカが付いていなければ働けない人でした。だから「わたしの卑しい体」と言っています。その卑しい体を**イエス・キリストの栄光ある体と同じ形に変えて下さる**のが復活なのだと言っています。これは神の**絶大な力**を信じて、はじめて成り立つ信仰です。

しかし卑しい体を栄光の体に変えて頂いても、自分の体の特徴を備えているのです。復活された主は、ご自分の手と足を弟子たちに差し出されました。そこには十字架に釘付けされた傷跡がありました。**十字架**こそキリストを表わす**印**だったからです。私も天国で「あんたは誰だい」などと言われず、「やあ加藤享」と声をかけてもらえる**私の特徴**を持ちながら、しかも**栄光に輝く体**で復活させていただけるのですね。

イエス・キリストを救い主と信じる信仰は、私たちがどのような死を迎えるとしても、十字架の主イエスと共に居て下さった**神が、私とも共に居て下さり**、終わりの日には、墓の中から復活させてくださり、栄光ある体に変えて、天国に迎えてくださる祝福を、約束しています。何と有難いことでしょうか。キリストの**十字架と復活**こそ、私たちの人生にとって、**最も大切な福音**なのです。

お祈りします。

イエス・キリストの父なる神さま、私たちはキリストの十字架に死の真相を示されて、死への恐れを深めます。しかしその死の最中にも、貴方は主イエスと共に居られて、墓よりの復活をもって救いの御業を現わされました。私たちにも、あなたがどんな時にも私と共に居て、祈りに答えて下さる信仰をお与え下さい。そして死の先に、卑しい体をキリストと同じ栄光ある体に変えて下さる復活の希望が備えられていることを信じて生きる者にして下さい。救い主キリストの御名によって祈ります。 アーメン